

# ヨーロッパにおける日本学の現状に関する研究

渡邊正彦・網野公一・八木橋伸浩

## I はじめに

日本学(Japanology)とは、一般に日本に関する西洋人による研究のことを指す。その嚆矢は一六世紀に日本に渡来したイエズス会などのキリスト教宣教師たちによる見聞であるが、それらをはじめ近代学問の俎上に載せて整理分類したフランツ・シーボルトの名は、その歴史を語る上で逸することはできないであろう。



長崎出島の模型(オランダ国立博物館)

江戸時代後期、日本が諸外国に対して国を閉ざした状況の中で、唯一貿易を許されたオランダから派遣されたことが、シーボルトのコレクションを可能にしたことは言うまでもない。それから程なく、諸外国の圧力に屈する形で日本が国を開いていく過程で、一八六七年のパリ万博に日本は参加する。そこで紹介された浮世絵や工芸品は、当時のヨーロッパの若い画家たちを中心に新鮮な驚きを持って迎えられた。絵画、工芸諸分野に渡り、日本の影響を受けた作品が次々に作られ、そのような風潮はジャポニズム(仏Japonisme)と呼ばれて、フランスを中心に当時の美術工芸壇を席卷した。

ヨーロッパに日本の文化が世界で初めて広く紹介された中で巻き起こったこの現象については、現代でも美術研究の一領域として様々な著作が発表されており、それらは日本学の一領域でもあるだろう。なるほど、西洋と日本、それぞれの文化が初めて正面から向き合った結果

として、さらに言えば文化の領域を越えた西洋と日本という大きな枠組みを相対化する契機の一つとして、それは大きな意味を持つものであったといえよう。ただし、その風潮が起こった当時の画家など当事者たちの意識からすれば、伝統の堆積するヨーロッパの中で、その風通しの悪さを打開するための一つの手段として、日本的なモチーフは冷静に眺められた上で作品の中に取り込まれていったということを、看過してはならないだろう。

グローバリズムの波の中で、現代を生きる日本人は、自身の国を客観化することが今後ますます困難になっていくことが予想される。そのような時代の中であって、今日外国の日本学の現状から、何らかの示唆が得られるのではないか。先のジャポニズムの例にうかがえるように、今日からすれば歴史的といえる事柄も、その当時の当事者たちの意識からすれば今日的な意識の上に起こったことであった。このような今日的な問題点をめぐって、ともすれば歴史研究に偏りがちな日本学、そのヨーロッパにおける現状について調査探求を行うことがこの共同研究の目的であったが、結果としてはコンテンポラリーな日本の状況に興味関心を向けながらも、日本に対して通時性と共時性の両面から探求していくことに、現在のヨーロッパにおける日本学の研究領域の中核がおかれていることが確認できたと考えている。

今回調査したのはオランダのライデン大学、オーストリアのウィーン大学で、ライデン大学については渡邊が、ウィーン大学については網野と八木橋が稿を担当している。

## II シーボルト——ジャパニコレクションをめぐる所感

渡邊正彦

オランダ アムステルダム近郊ライデンにあるシーボルト・ハウス日本博物館、および同地の国立民族学博物館には、ドイツ人医師シーボルト(1796—1866)が日本滞在中に蒐集した膨大なコレクションが収められてい

る。コレクションの内容は、彼が日本に滞在した当時の日本地図、植物や動物の標本、民具など多岐に渡り、それらを元としてオランダ最古の大学であるライデン大学は、世界で最初の日本学科を1855年に開設し、現在も東京に事務所を構えてアジア研究の支援、国際シンポジウムの開催などの活動を行っている。



ライデン大学校舎

2014年8月に玉川大学リベラルアーツ学部共同研究の一環としてライデン大学を訪問したのは、ヨーロッパの日本学の様態について、実地に見聞することが目的であった。もちろん、日本に関する研究をいながらにして日本人が行うことは、研究対象に関する資料の豊富さや調査の際のフットワークやネットワークなどの点から考えれば、大きなアドバンテージを有していることは言を待たない。しかし一方で、「木を見て森を見ず」の格言通り、日本や日本文化に関して、それらがあまりに近過ぎるがゆえに相対化できない部分があることを、われわれは意識していないのではないかという疑問は、かねてから抱いていた。実際、日本で生まれ育った人間は、成長の過程でいやが上でも習慣や思考の中に、日本の伝統でもいうべきものを、必ず自身の中に刷り込んでいるだろう。グローバル化の叫ばれる今日、われわれは今一度、それらを客観的に認識することが必要であり、そのために日本やその伝統と切れたところで育まれた視座に立って日本について研究を行った先人の業績は、その点について大きな示唆を与えてくれるに違いあるまい。

こういう動機で訪問したライデン大学、およびシーボルトのコレクションから考えさせられたことについて、本稿では記していきたい。

## 1

シーボルトは現ドイツのヴェルツブルグで、大学医学

部の教授を代々務める家系に生まれた。1815年ヴェルツブルグ大学に入学、医学を修めるかたわら植物学、動物学、地理学、民族学などを学び、1820年に卒業と同時に国家試験に合格して博士号を取得しているが、在学中から東洋研究に関心を示していたという。その動機については詳らかなことはわからないが、ヨーロッパからもっとも遠い極東の地の自然や文化に、エキゾチズムより来る憧れを抱いていたであろうことは想像に難くない。



ライデン大学シーボルト植物園

そんなシーボルトが実際に日本の地を踏むことになったのは、そのような彼のエキゾチズムとは全く関係のない、実際的な理由であった。イギリスにより占領されていた旧蘭領東インド（現在のインドネシア周辺）が1814年に返還されたことを機に、オランダは旧来の植民地政策の刷新を企てる中で、かねて行われていた日蘭貿易についても再検討しようという機運が生じた。その過程で日本に関する総合的な研究の必要性が、クローズアップされたのである。そんな状況の中、父の教え子であるオランダ国王の侍医の紹介により、東インド陸軍病院外科少佐に任命されたシーボルトは、日蘭貿易の門戸である長崎の出島のオランダ駐在員の健康管理と同時に貿易に資することを目的とした日本研究の使命を託されて、1823年日本に到着するのである。

彼の日本研究の成果がまとめられた大著「日本」に収められた分野は、彼のコレクションと同様に実に多岐に渡っており、その「序言」でも「オランダ領東インド政府の絶大な支持や、数多くの日本の学者・有力者たちのまれにみる好意を受けて、日本国とその隣接する諸国をよりよく知るために、自然科学や地理学・民族学の領域での広範な資料や多種多様な文献を集めることができた。博物学の領域では、オランダの高名な学者たちの協力を得、日本語・アイヌ語、それに今日まで未知のままの朝鮮語の辞書の編集には中国人秘書（中略）の助力を

得た<sup>(1)</sup>。」と記されている。

ところで、この引用で着目したいのは、シーボルトが広範な分野の事象に着目しながら自身の研究を進めていく上で、「自然科学」・「博物学」(総合科学)といった自身の立脚点を明瞭に意識していた点である。シーボルト日本博物館を訪問した際、まず目を引いたのは、シーボルトにより整理分類された植物の膨大な数の標本、そしてスパイの嫌疑をかけられて取り調べを受け、日本への再入国禁止という処置の下るシーボルト事件の発端ともなった当時の日本地図であった。現在の日本人から見れば、これらは見慣れたものに過ぎないが、植物は植物学の客観的な体系の中に整理分類<sup>(2)</sup>され、地図は地域別に詳細な地形が記されているものが集められていた。それらを目にしただけでも、彼が未知の国で初めて目にした諸物を、どのような視座から眺めたのかが、われわれの中に明瞭に浮かび上がってくるようだ。そして、その「視座」は、それまでの日本になかったものとして、彼の日本の門弟たちにより、引き継がれていくことになる。このことについて、シーボルトは「江戸参府紀行<sup>(3)</sup>」の中で、次のように述べている。



動植物標本 (シーボルト・ハウス)

一八二三年出島に着いた直後、われわれは(中略)当時長崎に滞在していた優秀な医師たちと知合いになった。彼らの中には江戸出身の身分の高い医師湊長安・阿波出身の若い美馬順三さらに三河から来た平井海蔵・岡研介その他方々の国々から来たたくさんの医師や学者がいた。彼らはオランダから新たに到着した医師で自然科学者の名声にひかれて長崎へやって来たのであった。

長崎奉行所高橋越前守の側からの特別の庇護により、これらの知識欲に燃えた人々は、出島のわれわれのところでは授業を受ける許可をえ、さらに彼らとともに長崎で病人を診察し、町の郊外で薬草を採集することが許された。こうして広範な研究や日本人との交渉の道が開かれたのである。(中略)二三の幸運な治療や手術によって大家としての名声を確立し、門人の数は日増しに多くなっていった。(中略)博物学およびその他の研究のため彼らに多くの期待をかけられると確信して、(中略)最も有能な数人を秘かに雇い入れ、(中略)鳴滝の谷にある風変わりなたたずまいの別荘に彼らを住ませた。まもなく鳴滝はヨーロッパの学術を愛好する日本の友人の集合地となり、順三と研介はわれわれが設立した塾の最初の教師となった。この目立たぬ地点から科学的教養の新しい光が広まり、それとともにわれわれの結びつきが日本国じゅうに行き渡った。この時以来われわれがあえて我が門人と呼ぶところの人々は、この地に彼らのヨーロッパ的教養のために最初の礎石を据え、われわれの研究に対して多大の貢献をしたのである。

彼が塾を構えた長崎市鳴滝にある長崎市シーボルト記念館には、彼が眼科手術を行った際に使用した手術道具が残されている。人間にとって切実な生死や健康の問題、そこにそれまでの日本の医術では考えられなかったような奇跡が西洋医学によりもたらされるのを、シーボルトを介して当時の日本人は目の当りにしたであろう。その彼の学識や技術、そして、それらが構築される基となった自然科学の思想までもも憧憬の対象として、それを身につけようとの考えを当時の日本人が抱いたことに、何の不思議もないであろう。すなわち、シーボルトが日本にもたらしたものは、西洋医学の技術や知見の背後にある、自然科学の思想であったといっても、決して言い過ぎではないだろう。

シーボルトは自身の日本研究に資すべく、門弟たちに医学以外にも「一般に使用されている薬品表」,「長門および周防国の地理的・統計的記述<sup>(4)</sup>」,さらには染色、塩の製造に至るまでさまざまな課題を与え、それらについて科学的な見地から探求させ、論文を書かせた。ある薬草が整理分類された体系の中に位置づけられた時、単にそれを眺めている際には分からなかった他の薬草との類似点、相違点が客観的に見えてくるであろう。また、自身の視野の中だけに収められているときには認識でき

なかったある地形の様態を、地図の中で鳥瞰することにより、そこは漁業の拠点にあるいは軍港に適しているなどのその地の属性が、浮かび上がってくるであろう。それらの例のように、物事を眺めるときの観点を換えることにより、自身が気づかなかったものが見えてくるという事実を、彼の弟子たちは痛感したのであろう。また、研究の対象が普段から慣れ親しんでいるものであるだけに、逆にそのように違った側面を明らかにしてくれる科学という方法論自体に、興味関心が及ぶともいえるかもしれない。このように考えてくると、シーボルトの日本における業績は、本格的な科学的思想の導入を日本に促したのものとして、今日評価することができるであろう。

現代の日本で暮らし、日本の事象を身に沁みこませているわれわれも、それら沁みこんだものを客観視するためには、今一度視点を変えてみる必要があるだろう。シーボルトの日本学は、その点を今日のわれわれに示唆してくれているといえよう。



展示会場入口のポケモン

## 2

シーボルト日本博物館を訪問した際、常設展の階上では「キャラクター王国ニッポン」と題された企画展が行われており、その入り口ではポケモンのぬいぐるみが出迎えてくれた。また展示会場には、「かわいい」キャラクターに囲まれた日本の女子高生の部屋が再現されている一画もあった。今回オランダと併せて訪問したウィーンの新報「DER STANDARD」の「KULTUR」版第一面(2014年8月27日)にも、日本で2013年7月に公開された宮崎駿「風立ちぬ」が映画の1シーンとともに取り上げられていて、アジア圏のみならずヨーロッパにおいて

も、現代の日本のサブカルチャーに関する関心の高いことがうかがわれた。

ところで、シーボルトのコレクションの中に取められた工芸品やそれを作成する際の工具、浮世絵、あるいは動物、植物の標本、地図など中身のほとんどすべては、現代のわれわれから見れば、それらは過ぎ去った時代の歴史上の産物であるが、彼がそれらを手に入れた当時は彼が滞在した時に実際に存在した、同時代のものであったことには注意を払われる必要があるだろう。すなわち、今日見れば‘historical’な日本を示すものである彼のコレクションも、集められた当時は、まさに‘contemporary’な日本を示すものであった。このことに、われわれが違和感を覚えるとするれば、ヨーロッパにおける日本の流行ということについて考える際、われわれ日本人の脳裏に、印象派をはじめとする画家たちの作品に浮世絵などの日本美術が影響を与えたとされる、十九世紀後半のジャポニズムのことが、歴史として思い浮かぶからかもしれない。



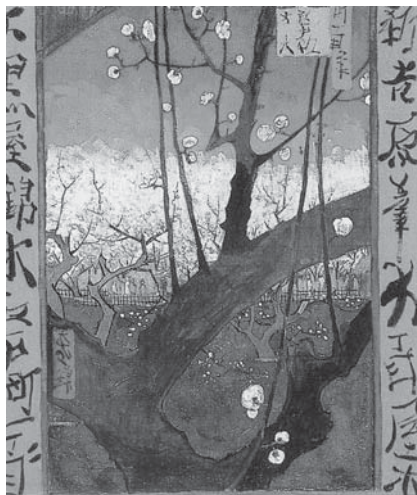
日本の女子高生の部屋

またアメリカでも、明治初期に日本に滞在し東大で講義をしたフェノロサが日本の古美術に魅せられ、平治物語絵巻の一部など現在では国宝級の日本の古美術品をアメリカに持ち帰った。さらには、コロンビア大学をはじめとするアメリカの大学で講義を行った鈴木大拙がアメリカの知識人たちに禅の思想を広め日本の伝統文化への関心を呼び起こしたこと、ドイツの建築家ブルーノ・タウトによる伊勢神宮や桂離宮に対する賛辞など、現在われわれが思い浮かべる外国人の日本をめぐる関心に端を発する言説の多くが、その賛辞が発表された時よりも以前の過去の日本に対して向けられていたことが、この違和感の根底にあるように思われる<sup>(5)</sup>。

確かに1867年にパリで、1873年にウィーンで行われた万国博覧会に出品された絵画や工芸などの日本の美術

品は、当時行き詰まり状態に陥っていたヨーロッパの美術の世界に新しい可能性を開示した。特に北斎、広重らの浮世絵は、モネやゴッホなどの画家に大きな影響を与え、今回の訪問で訪れたアムステルダム・ゴッホ美術館にも、ゴッホによる浮世絵の模写が展示されていた。美術史の観点から当時のジャポニズムについて論じている書籍は、今日の日本でも数多く刊行されている。しかし、その浮世絵にしても、現在の我々から見れば、過去の日本のものであるが、モネやゴッホがそれらを目の当たりにした際は、‘contemporary’な日本のものであった点には留意する必要があるだろう。

貿易を有利に進めるための資料としての一面を強く持ったシーボルトの研究以来、ヨーロッパの日本学は今日でも、‘contemporary’な日本に関する研究としての側面を持っており、そのことが現在のヨーロッパの、日本のアニメや「かわいい」などサブカルチャーに対する関心にも映し出されているのではないだろうか。そして、それは自身を取り巻く事象を客観視しようという博物学の方法論、その伝統の上に立脚している点が、少なからずあるように思われる。‘historical studies’としての日本研究は、今日のヨーロッパにおいては、日本研究の一領域ではあろう。しかし、それがすべてではないことが確認できたことは、今回のオランダ訪問の大きな成果であったと考えている。



ゴッホ 「日本趣味 梅の花」1887年  
国立ゴッホ美術館

われわれは無意識の中に刷り込まれた物事を客観視するために、歴史を紐解こうとする。しかし、そのこと自体が目的化し、ともすれば、その中に埋没して過去について考えることの今日的な意味を忘れていく場合が往々

にしてあるように思われる。そして、そのような枠組みの中から抜け出せないでいる学問のあり方は、自国の伝統の中に陥って、そこに生きる自分自身、その自分が生きる現代を、自国民であるからこそ客観視できないことと、おそらく相似しているのではないか。その点を踏まえて、十九世紀ヨーロッパのジャポニズムについて改めて考えてみると、日本の美術工芸品という‘contemporary’な異文化は、当時のヨーロッパの画家たちの中にあっては、絵画をめぐる彼らの伝統的美意識を相対化するものであったに違ひなからう。

常に自分のいる現在を意識しながら物事を眺めようとするのが博物学の本質の一端であるとするならば、その伝統の上に立脚した共時的な研究としてのヨーロッパの日本学、就中その現実に対するリアリスティックな態度は、今日グローバル化の進む社会で自身を取り巻く様々な状況を客観的に捉えようと試みていく上で、現在のわれわれに示唆を与えてくれる点がある、いまだに少なくないといえよう。

#### 注

- (1) 中井昌夫訳『シーボルト「日本」第一巻』（雄松堂書店 昭和五十二年十一月）
- (2) シーボルトのコレクションの中では、植物学的観点から整理分類された植物の標本が、特に目を引く。貝原益軒により、十八世紀初頭に日本でも植物を葉草として分類した本草学があったことも、このことと無関係ではないように思われる。なおシーボルトが日本からオランダに送った苗木のうち、十四種が現在シーボルト記念庭園のあるライデン大学附属植物園で生息している。
- (3) ジーボルト 斎藤信訳『江戸参府紀行』（平凡社 1967年3月）
- (4) 前掲『江戸参府紀行』（注(3)参照）
- (5) フェノロサの日本美術やタウトの日本建築に対する言説は、‘historical studies’としての側面を強く持っていたといえる。フェノロサは『美術真説』（大森惟中筆記 国文社第一支店 明治十五年十一月）の中で、「(画術は一渡邊注) 既ニ一タヒ極盛ノ期ニ達スレハ又漸ク衰頽ニ赴クハ自然ノ勢ナリ希臘ノ芸術ハ紀元前凡四百年既ニ其極盛ノ域ニ達シテヨリ以来寢ク衰頽シ (中略) 支那日本モ亦其例ヲ全クセリ支那ニ於テ画術ノ最モ善美ヲ極メシハ蓋シ唐宋ノ世ニアリ今ハ翻テ其勢ヲ失ヘリ又日本ノ画術モ既ニ数百年前ニ在テ甚タ精妙ナリシモ年ヲ逐フテ寢ク衰ヘタリ斯克東西ヲ問ハス其術ノ荐リニ退歩スルハ是レ豈偶然ナランヤ」と述べている。

またタウトも『ニッポン』（森としお訳 明治書房 昭和十六年）の中で、「日本！ それはヨーロッパ並びにヨーロッパ文明の支配する世界にとって日出ずる国である。さ

まざまの夢、奇蹟への期待、芸術文化と人間文化とその連想がこの国に結びつけられている。ヨーロッパとアメリカの芸術文化は疲弊し、古い形式は機械のためにその内容を失ってしまった。ヨーロッパの若くかつ優れた芸術家は何らかの打開の道を求めて、世界に目を配り、その結果純潔無垢なる形式を数千年にわたって育成して来たという点で、彼等に新たなる勇気を与える国として日本を見出したのであった。そこには古来このような形式が驚くばかり洗練され、なおかつ生命を保ち続け、現代の傾向にまったく合致するかと思われるような形で建築その他の芸術に現れていたのである。」と述べている。

両者とも過去の日本の美術がはらんでいる「時代性」を捨象して、各自の中に築かれた絶対的ともいえる美の基準を通して、表現を評価しようとしている点は共通していると言えよう。その時、表現されたものと、それに接している現在の自分との間に流れた時間は、そこに表された美の絶対性を証明するために、欠くことのできないものとして位置づけられている。

そのように過去から継起してきた時間の流れが、両者とも各自の美の判断に必須のものとなっており、その点に‘historical studies’としての彼らの学問の様態を窺うことができよう。

### Ⅲ ウィーン大学における日本研究

八木橋伸浩 網野公一



ウィーン大学本部校舎の外観

オーストリアのウィーン大学はヨーロッパにおける日本研究の中核的な存在として知られてきた。なかでも、民族学や文化人類学の分野においては「通時性」と「共時性」の両側面から対象に迫るウィーン学派の手法がもたらした影響は大であり、例えばアジアや日本を対象とした研究においても多数の業績を残したネリー・ナウマンの研究手法も同様であったことを指摘できる。筆者自身、大学院生時代にナウマンから得た学問的な示唆は、まさに啓示のごときものとして記憶に残っている。また、

著作『異人その他』で知られる岡正雄は洪沢敬三の援助を得てオーストリアに渡り、ウィーン大学においてヴィルヘルム・シュミットに師事してウィーン学派の民族学を学び、博士論文「古日本の文化層」で博士号を授与されている。岡はその後、ウィーン大学日本研究所の初代所長をつとめたことでも知られ、当該分野の学史を語るうえでウィーン大学は欠かすことのできない存在となっている。

本稿では、ウィーン大学を訪問した際にアンジェリカ・クラマー先生からご提供いただいた資料「ウィーン大学、及び東アジア研究所の概要」の記述と、同教授からお伺いした内容をもとに、同大学における日本研究の歴史ならびに現在の日本研究の位置づけについて簡単に整理しておきたい。

#### 【日本研究の歩み】

ウィーン大学は1365年（貞治4年）に設立された大学で、設立当初はルドルフ4世大学と称していた。ここで本格的な日本研究が始まったのは19世紀中期の1847年、アウグスト・プフィツマイアーによる柳亭種彦『浮世形六枚屏風』の独訳版の仕事が嚆矢とされている。A.プフィツマイアーは東洋言語学・東洋文学研究を専門とした人物である。

その後20世紀に入ると、1935年頃から三井高陽男爵により東欧の日本研究に対する金銭的な支援が始まり、1938年、ウィーン大学に「日本研究所」が設立された。この時の初代所長として招かれたのが先述した岡正雄である。岡は戦況が悪化する1940年までウィーンに滞在した。後に所長は村田豊文に引き継がれるが、1945年の第二次世界大戦の終戦とともに同研究所は閉鎖となった。

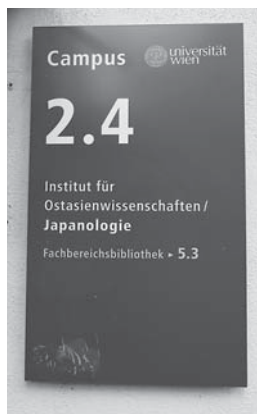
再興したのは1965年である。初期の研究所設立時に助手を務めたアレクサンダー・スラヴィックが主任教授（所長）に就任し、「日本学研究所」として再出発したのであった。A.スラヴィックは社会研究を重視した日本研究の開拓者として位置づけられており、1971年まで所長の任にあった。これを引き継いだのが民俗学・民族学を専門とするヨーゼフ・クライナーで、1977年まで同研究所を牽引したのである。彼の後に35年近くの長きにわたり研究所の牽引役をつとめたのがゼップ・リンハルト（1978年～2012年）で、民族学・社会学を専門としている。こうした歴代の所長の研究領域を反映するかたちでウィーン大学の日本研究は進められ、民族学・文化人類学・民俗学・社会学といったフィールド重視の

日本研究が展開されてきたのであった。

ちなみに、ウィーン大学に専門の学科として日本学科が開設される契機となったのは研究所再興の年である1965年で、同年にはまず博士課程が設置され、1978年には修士課程が、2003年には学士課程が設置されている。

また、ウィーン大学に在籍した元学生には岡正雄以外に、石田英一郎（人類学）、住谷一彦（社会学）、大林太良（人類学・神話学）がおり、さらに斎藤茂吉（歌人・精神科医）や中島義道（哲学）もここで学んでいる。

2013年現在、研究所ではヴォルフラーム・マンツェンライターが社会学を、イナ・ハインが文学とカルチュラルスタディーズを中核に据えた日本研究が進められている。この2人の教授以外には、助教授1人、研究員としてポストドク2人、プレドク1人、特別研究員2人、日本語教員7人（常勤3人、非常勤4人）がおり、その他の非常勤教員として約10人が活動する体制となっている。



日本研究を示す校舎外のボード（ウィーン大学）

#### 【ウィーン大学における日本研究の現状】

ウィーン大学は現在、総学生数約8万5,000人（2013年11月現在）、総教職員数約9,500人を有し、ドイツ語圏の大学では最大の規模を誇っている。カトリック神学部、法学部、歴史・文化学部、心理学部、哲学・教育学部など15の学部と、分子生物センターなど4つのセンターで構成され、日本研究が進められているのは「文学・文化学部」である。文学・文化学部の総学生数は約2万人で、所属教員は現在、教授64人、講師・助手約250人となっている。なお、当該学部は大学設立当初の「文芸学部」（後に文学部）を発祥としている。この大規模学部は、アフリカ学をはじめとする13の領域に分けられているが、その一つに「東アジア研究」があり、この研究領域はさらに「中国学」「日本学」「韓国学」「東アジ

ア社会経済学」に細分化されている。前述の「日本学科」はここに位置し、学士課程・修士課程・博士課程により構成されている。この3課程で構成されるのは中国学・韓国学も同様であるが、東アジア社会経済学は修士課程と博士課程のみの設置となっている。図はこの東アジア研究を象徴的に示すシンボルマークとして使用されているもので、漢字の「水」のなかに中国学（Sinologie）、韓国学（Koreanologie）、日本学（Japanologie）の各頭文字が配置されている。



図 東アジア研究所シンボルマーク



1999年に作られた日本庭園および日本研究の拠点校舎(ウィーン大学)

表1 「東アジア研究」在籍学生数の内訳（2011/12年度）

	バチェラー (学士課程)	マスター (修士課程)	ドクター (博士課程)
日本研究	802	72	8
中国研究	755	96	11
韓国研究	156	4	8
東アジア 社会経済	—	133	—

出典：「ウィーン大学、及び東アジア研究所の概要」より転載

表2 日本学を専攻する学生の学士課程 (BA) のカリキュラム

学期	語学	学術	知識 (講義)
1	日本語入門 (日本語理論1)	日本学入門	人文地理・歴史1 (基礎)
2	日本語理論2 (文法など) 実用日本語2	方法論	人文地理・歴史2 (基礎)
3	日本語理論3 実用日本語3	基礎ゼミ1 異文化理解 研修ゼミ1	文化・社会 (基礎)
4	日本語理論4 実用日本語4	基礎ゼミ2 研修ゼミ2	政治・経済 (基礎)
5	日本語理論5 実用日本語5 新聞講読	BAゼミ1	専門知識1 専門カリキュラム1
6		BAゼミ2	専門知識2 専門カリキュラム2

出典：「ウィーン大学、及び東アジア研究所の概要」をもとに筆者作成

表3 日本学を専攻する学生の修士課程 (MA) のカリキュラム

以下のモジュールを4学期を目安に習得	
●古語 (文語, 漢文)	●日本語 (上級)
●専門講読	●日本学方法論
●日本語 (上級)	●専門知識
●日本学方法論	●専門ゼミ1
●専門ゼミ1	●専門ゼミ2
●マスター・ゼミ	●東アジア研究ゼミ
●マスター試験	

出典：「ウィーン大学、及び東アジア研究所の概要」をもとに筆者作成

東アジア研究は一つの研究所 (東アジア研究所) としても独立しており、この研究領域に所属する2011/12年度学生は1,729人であった。ちなみに、当該年度に勉強を開始した学生数は日本学146人、中国学133人、韓国学33人、東アジア社会経済学 (MA) 16人である。また、同年度における各研究領域に所属する学生数は表1のとおりである。日本研究と後発の中国研究はほぼ同じ程度の学生数が在籍しており、近年、その経済発展ぶりから中国に関心を抱く学生が増加傾向にあるという。現在、日本学に所属する学生の多くはアニメや漫画などのサブカルチャーへの関心が高く、古典的な対象への関心はさほど高くはないとのことで、それは卒業論文の研究テーマなどにも如実に反映されているとのことであった。

なお、東アジア研究所付属図書館の蔵書数は現在、約11万冊であるが、このうち日本関係の書籍が約55パーセント、中国関係が約30パーセント、韓国関係が約15パーセントとなっている。表2は日本学を専攻する学生の学士課程のカリキュラム、表3は同じく修士課程のカリキュラムを簡単に示したものである。参考までに掲載しておく。

(以上、文責 八木橋伸浩)

### 【日本学専攻 Japanologie の近年の具体的な研究動向】

ウィーン大学 Universität の文献学的文化学部 Philologisch-Kulturwissenschaftliche Fakultät に設置されている東アジア研究所 Ostasienwissenschaften 内の日本学専攻 Japanologie の部門での具体的な研究動向について、近年の業績を中心に紹介する。日本学専攻 Japanologie は研究動向を外的に公示している。(このサイトは本視察後、我々チームの要請に依って開設されたコーナーである)

公示されているものは教授資格取得論文 Habilitationen と学位論文 Dissertationen である。

元々は日本学研究所であったが、教授資格取得論文 Habilitationen は6点、学位論文 Dissertationen は20点 (旧論文として22点が書き加えられている。ウィーン大学内の研究施設の再編に伴って、東アジア研究所内に日本学専攻として再編されたのである。従って「旧論文」の表記が存在している) が掲載されている。教授資格取得論文 Habilitationen は、1966年から2012年にかけて提出されたもので、研究所の再編以前からの論文を網羅して掲載している。一方、学位論文 Dissertationen は1992年から2014年に提出されたものである (旧論文は1968年から2003年に提出されたものである)。

### ◆教授資格取得論文 Habilitationen について

以下6点が掲載されている。

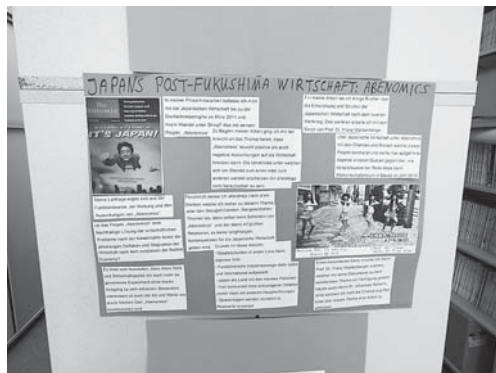
- ① ヴォルフラム・マンツェンライター Wolfram MANZENREITER 著の「日本におけるスポーツと健康のための政策 Sport and Body Politics in Japan.」(2012)
- ② イングリット・ゲトロイアー＝カーグル Ingrid GETREUER-KARGL 著の「性と空間～日本の階級制度下の性別比率についての一考察～ Geschlecht und Raum. Eine Untersuchung zur Hierarchie des Geschlechterverhältnisses in Japan.」(2004)
- ③ マーチン・カネコ Martin KANEKO 著の「近代日本



の繊維工業に於ける社会的少数弱者としての女性労働者の雇用，部落及び沖縄出身の女子工員と労働運動での彼女たちの役割 Die Beschäftigung von weiblichen Arbeitskräften aus gesellschaftlich benachteiligten Minderheiten in der modernen Textilindustrie Japans. Arbeiterinnen aus Buraku und Okinawa und ihre Rolle in der Arbeiterbewegung.」(1992)

- ④ ペーター・パンツァー Peter PANTZER 著の「第1部：さ迷えるオーストリア帝位，日本人詩人斎藤茂吉のオーストリア帝国滞在の手記I：Fliegende österreichische Krone. Die Essays des japanischen Dichters Saitō Mokichi über seinen Aufenthalt in Österreich；第2部：カール・リッター・フォン・シェルツァーの日本滞在日誌（1869）II：Das Japan-Tagebuch von Karl Ritter von Scherzer（1869）；第3部：オーストリア帝国国立図書館のジャポニカIII：Die Japonica der Österreichischen Nationalbibliothek.」(1986)
- ⑤ ゼップ・リンハルト Sepp LINHART 著の「日本における労働，自由時間（余暇），と家族，大企業での工員と社員の生活様式についての一考察 Arbeit, Freizeit und Familie in Japan. Eine Untersuchung der Lebensweise von Arbeitern und Angestellten in Großbetrieben.」(1976)
- ⑥ ヨーゼフ・クライナー Josef KREINER 著の「日本の村落の祭祀，特に宮座を中心として Die Kultorganisation des japanischen Dorfes unter besonderer Berücksichtigung der miyaz.」(1966)

◆学位論文 Dissertationen について



学生による日本研究のポスター

以下の通り，研究所の再編以降の論文として20点が

掲載されている。

- ① ヤスコ・ヤマモト Yasuko YAMAMOTO 著の「文化の翻訳～1900年頃のドイツ語音楽劇の実例に即して日本語への翻訳過程の一分析～ Übersetzen von Kulturen: Eine Analyse der Transferprozesse am Beispiel des deutschsprachigen Musiktheaters mit japanischen Motiven um 1900.」(01.08.2014)
- ② カトリン・ライトナー Katrin LEITNER 著の「スポーツとしての，学業としての，職業としての日本のスポーツ指導者への道，スポーツ指導者として学業と職業教育の一体化と日本スポーツ界での現役引退後の地位を得ることへの過程 Der sportliche, schulische und berufliche Weg japanischer Leistungssportler. Die Vereinbarkeit von Schul- und Berufsausbildung mit der Ausübung von Leistungssport und der Übergang in die nachsportliche Karriere im japanischen Sportsystem.」(27.01.2014)
- ③ ドラゴス = ボーグダム・メリンテ Dragos-Bogdan MELINTE 著の「グラフィックとストリートアート，現代日本のサブカルチャーのソーシャルネットワーク上の作品 Graffiti und Street-Art. Das soziale Netzwerk einer modernen Subkultur in Japan.」(6.7.2012)
- ④ イザベラ・プロチャスカ Isabelle PROCHASKA 著の「神人（カミンチュ）此岸と彼岸の仲介者，沖縄における精神治療についての論究 Kaminchuu Mittlerinnen zwischen Diesseits und Jenseits. Eine Erörterung der spirituellen Heilung in Okinawa.」(31.5.2011)
- ⑤ ジンコ・シェルツ Jinko SCHELZ 著の「近代日本の教育制度が推進したこと，国家建設，近代化，教育制度の発展 Die Durchsetzung eines modernen Bildungswesens in Japan. Staatsbildung, Modernisierung und Schulentwicklung.」(30.11.2010)
- ⑥ クリストフ・クローゼ Christoph KLOSE 著の「日本の腐敗，定義，計測，原因，抑止 Corruption in Japan. Definitions, Measurements, Causes and Deterrents.」(27.9.2010)
- ⑦ レナーテ・ノダ Renate NODA 著の「『今日，私が住まいに帰った時，旅装にはまだ歓びが付着していた』江戸時代の女性旅行者とその旅日記 „Als ich heute in meine Herberge zurückkehrte, da haftete an meiner Reisekleidung noch die Freude “. Reisende Frauen aus der Edo-Zeit und ihre Reisetagebücher.」

- (17.5.2010)
- ⑧ ノリコ・ブランデル Noriko BRANDL 著の「錦絵～國芳の風刺画～ Die *nishiki'e*-Karikaturen von Kuniyoshi.」(12.3.2009)
- ⑨ ナカムラ・ヨーコ Yoko NAKAMURA 著の「武士道論争, 1904年の武士道論争におけるアイデアと実践の間の矛盾についての一考察 Bushidō-Diskurs. Die Analyse der Diskrepanz zwischen Ideal und Realität im Bushidō-Diskurs aus dem Jahr 1904.」(22.1.2009)
- ⑩ ローランド・ドメニッチ Roland DOMENIG 著の「薬害AIDS, 薬害の病理学, 日本の血友病HIV感染について *Yakugai* AIDS Pathologie eines Arzneimittelschadens. HIV-Infektionen von Hämophilen in Japan.」(2004)
- ⑪ ブリジtte・シャントル Brigitte SCHANTL 著の「外国での日本のイメージ, 実態とイメージと旅行広報 Das Image Japans im Ausland. Selbstbild, Image- und Tourismuswerbung.」(2002)
- ⑫ スザンネ・フォーマネック Susanne FORMANEK 著の「江戸時代の日本の大衆文化の典型的悪人像, ～前提, 烙印, 社会背景～ Die böse Alte als Standardfigur der japanischen Populärkultur der Edo-Zeit: ältere Voraussetzungen, motivische Ausprägungen, soziale Hintergründe.」(2001)
- ⑬ ブリジtte・シュテガー Brigitte STEGER 著の「睡眠時間(が少ない?), ある日本学的, 社会学的研究(Keine) Zeit zum Schlafen? Eine japanologisch-sozialwissenschaftliche Studie.」(2001)
- ⑭ ベルンハルト・シェイド Bernhard SCHEID 著の「吉田神道, 中世末の日本の密教 Yoshida Shintō. Eine esoterische Lehre des japanischen Spät-Mittelalters.」(1999)
- ⑮ ヴォルフラム・マンツェンライター Wolfram MANZENREITER 著の「日本のアルピニズムの社会的構築, 近代登山における文化, イデオロギー, スポーツ Die soziale Konstruktion des japanischen Alpinismus. Kultur, Ideologie und Sport im modernen Bergsteigen.」(1998)
- ⑯ メグミ・マダードンナー Megumi MADERDONNER 著の「少女マンガの世界, 少女像の鏡としての日本の少女コミック *Shōjo manga no sekai*. Japanische Mädchen-Comics als Spiegel der Mädchenwelt.」(1997)
- ⑰ アネモネ = アイミー・プラッツ Anemone-Aimée PLATZ 著の「生活態度に見る日本の若年層の社会化の過程, 1945年以降の北海道での2つの若年層の比較研究 Sozialisationsprozesse japanischer Jugendlicher im Wandel. Eine vergleichende Untersuchung von zwei Jugendgenerationen auf Hokkaidō nach 1945.」(1997)
- ⑱ ザビーネ・フリューシュトゥック Sabine FRÜHSTÜCK 著の「性的知識の政治学, 1908～1941年間の日本における性的知識の創出と大衆化 Die Politik der Sexualwissenschaft. Zur Produktion und Popularisierung sexologischen Wissens in Japan 1908 - 1941.」(1996)
- ⑲ ヴォルフガング・ヘルベルト Wolfgang HERBERT 著の「日本における外国人犯罪, 不法入国外国人の就労についての賛否を巡る論争から Ausländerkriminalität in Japan als Argument in der Diskussion um ausländische illegale ArbeitsmigrantInnen.」(1992)
- ⑳ オットー・マダードンナー Otto MADERDONNER 著の「オーストリアの高等学校での日本語授業の統合について Integrativer Japanischunterricht an Höheren Schulen Österreichs.」(1992)

以上である。内容的には、もしくは方法論的には社会科学・政治的・経済的なアプローチ、民俗学的・美術史的・人文学的なアプローチの2つに大別できであろう。調査・研究の対象を日本全域という空間へ視野を広げているもの、またはより狭い地域、例えば一村落に限定して調査を行っている論文もある。時代的には江戸時代をはじめ、近代日本、現代日本が主な時間的な領域と言えるだろう。調査・研究による同時代の共有される知の体系に基づく研究方法が採用されていて、現代的な研究の手法が採用されているようだ。サマリーを概観したところでは、論文の体裁、資料の取り扱い方、論旨の進め方にとどまることなく、研究の業績として認められるレベルの論文が多いように感じる。日本学専攻の教員スタッフへの聞き取り調査前の段階では、サブカルチャーやマンガ文化といったもの等が調査・研究の対象であろうかと推測していたが、サブカルチャーやマンガ文化に関する論考は存在するけれども、それらは導入(日本学に関心を持つようになる)もしくは切っ掛け、興味の糸口、端緒といった段階であり、むしろ学位論文や教授資格取得論文の研究の大筋は、コミックを産み出した社会の構造や文化の蓄積の在り方、人間関係の日本の特殊性、教育制度の在り方にまで言及し、分析を加えて日本、お

よび日本の社会構造, 日本人のメンタリティー, などを理解して行く段階まで昇華されているようだ。

(以上, 文責 網野公一)

注 本研究は, 平成26年度玉川大学リベラルアーツ学部共同研究助成金のサポートを受けて行われた。

(わたなべ まさひこ／あみの こういち／  
やぎはし のぶひろ)